

目的 男性は、女性のような閉経という性腺機能の低下はみられないが、加齢に伴って身体的な機能低下ならびに精神・心理的な変化の出現に従い、ライフサイクルにおける“ふしめ”を認知する時期は存在すると考えられる。そこで、生活条件の差異により、このような変化を意識する時期を観察すると同時に、疾病罹病との関係を観察した。

方法 都内の某光学器機企業従業員405人、A女子大学の学生の父親432人、さらに、B女子大学の学生の父親758人、いずれも40—60歳男性に面接調査を行なった。

結果 男性の加齢に伴う身体的な機能低下ならびに精神・心理的な変化を意識する年齢、すなわち、ライフサイクルにおいて“ふしめ”を認知する時期は、食事（不規則的、規則的）、悩み（有、無）、健康維持の努力（不実行、実行）に関連した生活活動状況の差異によって、大別して、45歳前後と50歳前後とに区分できる。また、その前後2年以内に半数以上のものが成人病に罹病していた。管理的職業、技術・専門職種のもの、家庭・職場に悩みのあるものが比較的罹病していた。しかしながら、その後、再発や罹病を繰り返すもの（重複罹病者）は、健やかな社会生活を送るもの（一病息災者）に比べて不適切な生活活動を送っていた。また、食事内容も悪く、タンパク質の充足率も低く、食塩ならびにアルコール摂取量も比較的多かった。一方、“ふしめ”にも罹病しないもの（無病息災者）は、悩まない性格で、食事も規則的に摂取すると同時に節酒、節煙しているのであった。以上の結果、加齢に伴う変化の意識の側面から、男性においても“ふしめ”を認知する時期は存在し、また、半数以上のものが罹病を伴っていた。さらに、このような“ふしめ”の出現には生活状況が関連し、不適切な生活活動を送っている場合には比較的早期に出現し、あるいは、罹病しやすいと考えられる。